

公衆衛生 書評

地域保健活動の醍醐味を伝える一冊 『無名の語り—保健師が「家族」に出会う 12 の物語』

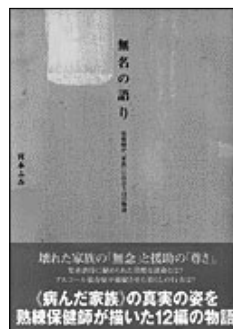
評者 上木隆人 東京都八王子保健所長

本書は、事例を通して語られる保健師活動の“ドキュメンタリー、記録”である。

きっと本書ほど多くの人にインパクトを与える本は、他の分野を見てもそうはないだろう。第1話を読んだだけでも、保健師という職種の特徴がわかりやすいし、「保健師って、こんな仕事の仕方をするんだ」と感嘆してしまうことだろう。保健師の活動は行政の中でも意外と理解されず、「地域の中にのめり込んでいて見えない」とよく言われていた。また一般にも知られず、看護師と同じように思われている。これは大変残念なことであるが、本書では、保健師が行う住民への療養支援活動や地域組織活動が、事例を通して大変わかりやすく語られている。

そもそも保健師活動に関する本は少ないので、本書は多くの点で大きな期待が寄せられると思う。保健師本人たちにとって、事例の中に出てくる活動の様々なノウハウは非常に勉強になるものであり、テキストの役割まで果たしている。私の保健所長としての立場からは、もっともって保健師活動を広めるために、行政関係者や一般の人に保健師活動の内容や特徴を知ってもらい、保健所が保健師によってこれだけの活動をしているということをも本書から理解してもらいたいと思う。その他の保健所

宮本ふみ・著：無名の語り—保健師が「家族」に出会う 12 の物語。1,800 円＋税、医学書院



職員にも勉強になるし、地域で健康問題に関わる多くの人たち、医療、福祉、消防、警察、民生委員や社会福祉協議会、ボランティアの人にも興味を持って読んでもらえると、期待するところ大である。

本書の前半部分は、導入として保健師活動の要点が理解しやすいように事例が紹介されていくが、後半はいわゆる「処遇困難」と呼ばれる事例となっている。どれも著者の苦労がにじみ出て、実に生々しく、複雑で、解決困難で、読んでいてドキドキするような事例で、あたかも小説のように読者を夢中に引き込んでいく。これらの物語は、家族背景、病歴背景、その人の人生背景、社会背景などが重なり、その上で健康問題が起きていることが自然と理解できるように書かれており、健康と社会の関連を考えさせられ、読者をしばし保健師の世界へと導いている。著者の文才もさることながら、これらは貴重な事例報告なのである。

本書は、地域で対応を迫られる多くの人には是非とも読んでもらいたい一冊である。多くの職種が皆でこのように活動し、相互に発展できれば、支援の喜びも尚更であろう。